



「模試」で学力が大きく伸びるとしたら

「公開模試をきちんと受ければ、それだけでも力がつく。」

創学舎で模試を実施する際の掲示物に書かれているので読んでいただく人が多いだろう。

「真剣に受けなければ、集中力も粘り強さも身につかない。本番の入試の時に困るぞ。」とも書かれている。

では、「真剣に模試を受ける」とはどういう状態のことか？

おそらく全ての受験生が入試本番では極限まで集中力を発揮し、最後まであきらめずに問題にしがみつこうとするであろう。その集中力や執着心と同じレベルで模試に取り組む。それができるか否かである。

二学期が始まり中学三年生は模擬試験が続く。毎月の塾内模試(九月から一月までで計五回)、会場模試(塾の申込だけでも最低三回)、さらには学校でも実力テストがあるだろう。嫌気がさしてしまいかもしれないが、模試の受け方ひとつで学力の伸びは大きく変わるので、模試を生かささない手はない。これは受験生だけではなく、すべての学生に共通している。もしも真剣に模試を受けていないのであれば、今すぐに意識を変えるべきである。真剣に受けないと本人の正確な点数・偏差値

が出ないばかりか、脳が怠けて退化してしまうので、むしろ逆効果だからだ。

受験生にとっての模試は入試本番のための準備で、言わば「リハーサル」である。受験生ではなくても、今受けている模試の積み重ねが集大成となって入試を迎えるはずだ。

イチローは言った。『準備』というのは、言い訳の材料となり得るものを排除していく、そのために考え得るすべてのことをこなしていくことである。』と。

「入試が終わった後に『時間が足りなかった』という言い訳が一番みっともない。足りなかったのは試験時間ではない。時間が足りるようにする訓練が足りなかったのだ。」とは受験生時代の私の恩師の言葉。

また、聴衆を魅了することにかけては世界一のプレゼンターとも言われるスティーブジョブズ。ジョブズは「神は細部に宿る」という信念を持っていた。スライド一枚一枚や小道具にいたるまで、一切の妥協を許さず、たった五分間のプレゼンのために数百時間も費やし、リハーサルには丸二日もかけていたことは有名な話だ。

成功者はみな知っているのだ。本番での失敗は偶然ではなく必然の産物であると。だから言い訳になり得ることを見つけ出すことに全身全霊をかけ、徹底的に排除していくための準備に余念がないのだ。



想像してみてください。今すぐに入試を終えたら、あなたはどんな言い訳をしようだろうか。

「時間が足りなかった」
「午前中は頭が回らなかった」

「緊張した」

「ケアレスミス」

「条件を読み落とした」

「隣の受験生が、M▶※◎∴」……

本番後に言い訳をしなくて済むように、今から真剣に探そう、自分の弱点を。徹底的に探そう、お医者さんが健康診断で身体の細部まで悪い部分を探し出すように。本番と近い環境で受けることができる模試で。

そしてジョブズが「神は細部に宿る」と言ったように、一問一問にもこだわってほしい。試験時間の残り一分一秒まで真剣に考え抜いてほしい。忘れてしまった事項はその場で必死になって思い出してほしい。たとえ正解に至らなかったとしても、情熱を傾けた問題は「解き直し」をすること

で大きな意味を持つが、「いい加減にやると、後で復習しても全く効果がない。」同じ間違いでも、いい加減に解いて間違うのが問題なのであって、考えを尽くした末の間違いであれば、それは財産だ。「間違い」という同じ言葉では決してひとくくりにすることはできない。

たしかに、模試は「今の実力を測る」ことの意味もあるが、それ以上に「実力をつける」ための訓練の場である。

「本気で志望校に合格したい」
「何が何でも実力をつけたい」

という情熱があれば、真剣に模試を受けるはず。真剣に模試を受けている人は普段の勉強においても、目の前の一問一問に、一分一秒に真剣になっているはず。模試を真剣に受けるから普段の意識が変わるのか、それとも普段の意識が模試の受け方を変えるのかはわからないが、真剣に模試を受

けているか否かが学力の伸びを大きく左右することとは間違いはない。

さて、ジョブズはたった五分間のプレゼンの準備のために膨大な時間をかけました。みなさんは、入試当日のたった五枚の解答用紙のために、どれほど膨大な時間と情熱を傾けていきますか？

「公開模試」のポイント

公開模試を受けるにあたって具体的なポイントを挙げておきます。

●公開模試の受け方

- ①真剣に受けないと本人の正確な点数・偏差値が出ない。
 - ②真剣に受けなければ、集中力も粘り強さも身につかない。本番の入試の時に困るぞ。
 - ③公開模試をきちんと受ければ、それだけでも力がつく。
 - ④いい加減にやると、後で復習しても全く効果がない。
- (創学舎の掲示物より抜粋)

●模擬試験は、「力を測るためのもの」ではなく、「力をつけるためのもの」という訓練の場だと意識して受けてください。

- ①本番と近い環境で試験を受ける訓練
- ②修羅場をくぐり抜けて粘り強さを身に付ける訓練

- ③時間配分の訓練
- ④出題問題の傾向の確認訓練
- ⑤後で、解けなかった問題を解けるようにする訓練
- ⑥自分の弱点を見つけ出し克服する訓練

●自己採点後の「解き直し」のポイント
 まずは、丸つけにおいて「きちんと反省する」こと

- ①間違いに気づく
- ②正しい解答・解法を理解する
- ③自分の解答・解法がなぜダメなのか理解する
- ④間違いが起きた理由を理解する
- ⑤同じ間違いを防ぐ・減らす方法を確立する

「再現性」のある解法を学び、しっかりと「再現」できるようにするまで「解き直し」を行い、さらにその解法を「理解」することが大事。「再現」できるようになるまで、しっかりと手と頭と心を動かそう。

●勉強は模試中でも普段の学習であっても「没頭した時間」が大事です。成績が上がる子は脇目も振らず教科書やテキストを読んで理解し、どんどん演習を進めています。集中力のない二時間と没頭した三〇分であれば、後者の方が断然成績に反映されます。



●模試の判定で一喜一憂することもあるかもしれませんが、模試をよりよく活用し、実力をつけて「第一志望合格」に向けて頑張ってください！

(櫻村)

まず、全力投球せよ

●この時期になると、受験生はいろいろと落ち着かなくなる。勉強が順調に進んでいる者は大丈夫だが、順調に進んでいなかったり、まったく手がつかなかったり、また自分ではやっているつもりだが成果が出なかったり、といった者に特によく見られるようだ。ここでは、彼らに一つアドバイ

スをしてみたい。ただ、これは受験生に限った話ではないから、他の人も参考にしてほしい。

●それは、今やっていることに真剣に取り組みたい。こう聞けば簡単なことだが、実行するのは難しい。例えば、数学の勉強をしているとき、今解いている問題を何とか解けるようにしようと思死になっているか。「ああ、私



が解けないのはこの問題じゃない。もっと難しい問題だ。」などと思っていないか。そう思っていたのでは、簡単な問題だつて解けるようにはならない。そもそも難しい問題が解けないから、簡単な問題から解いているのだ。最初から難しい問題など解けるはずがない。また、ある本をやりながら、「彼がやっている本のほうがいいかな。」などと考えないことだ。本屋に行けば、参考書・問題集は山のようにある。それを全部やるわけにはいかない。それに、人間が一度に解ける問題は一問しかない。まず目の前にある問題を解く。それが第一歩なのだ。もちろん、一回解いたぐらいでは自分のものにはならない。その問題を見ると解法がパツと浮かび、スラスラと解ける、それぐらい繰り返して解いて初めてその問題は自分のものになる。時間制限があり、普段より緊張するテストでは、そこまでしなければ点はとれない。まず、目の問題に全力投球せよ。そして、自分のものになった問題を一つ一つ増やしていくことだ。

●そう考えれば、自分では勉強していると思っている時間以外でも、疎かにできないことが分かるはずだ。学校の授業中でも、息抜きの時間であっても、目の、今やっていることに真剣に取り組みの。学校の授業中に寝ていたり、友人と話したり、ボートとしていたり、一体何時間無駄にし

ているだろう。受験に関係ない科目でも、その授業時間は真剣にその科目を勉強しよう。少なくとも、期末テストで特別な時間をとらなくても点は取れるはずだ。また、息抜きの時間は、勉強のことは考えず、心の底からリラックスしよう。

●こう言えば、「先生、私は息抜きに命をかけた。」などという者が出てきそうだが、もちろん物事には優先順位というものがある。そのとき、そのときでやるべき事には適切な順番がある。それを頭にいれて、今やることに全力投球、最後のひとふんばりをしよう。(大場)

テレワークの父親はつらい？

●私が担当する高三のクラスの一部で、父親がテレワークをしているかどうか聞いた。十五人ほどだろうか。

●嗚呼……。父親とは何かかわいそうな存在なのか。「家にいるのはいやだ。」と9割の生徒が答える。授業中だから詳しい理由はいえないのだろう。「何か気になる」「落ち着かない」「ピリピリしているのが伝わる」「とにかくうざい」……。家族のために一生懸命働いているのに、こんなことを言われてかわいそうだ。

●これは何もテレワーク中の父親に限ったことではない。概して父親の旗色が悪い。年間で千回程生徒面談をするが「問題をかかえているかな？」と思つて、原因を探る中で父親のほうへの不満が出る人が多い。いやいや、父親というのはかわいそう。

●実は、私も余りよい父親ではなかったと思う。息子とは中三〜大学一年くらいまで余り言葉をかわすことはなかった。私の顔に、空気に相手を気

づまりにさせるものが浮んでいたのだろう。受験勉強だけをとりあげても「何をやっているんだ。」

「もっとやれるだろう。」「しっかりとやれ。」「そんなやり方ではダメだ。」「こんなことを思っていて、それがにじみでていた気がする。ただこういうことを口に出しているのは、それほどしなかった。私自身の気質からすると、教育関係の仕事に就いていなかったら、がらがんやっていたはずだが、そうやって成功した家庭はないことを実例としてたくさん見てきたからである。

●今は息子も家庭を持ち、しっかりと働いている。まずまず仲は良い。私のほうは息子をけっこう評価しているし、息子も他所で私のことを尊敬していると言っているのがもれ伝わってくる。だから、世の父親たちも悲しむ必要はない。そもそも中高生の年代は、世の中の、そして親の価値観を疑うのが定番であり、父親の役割の一つが壁として立ちほだかることでもあるからだ。(立ちはだからなやり方もある。)

- しかし、次のようなことだけはセルフチェックしてほしい。
- ①子供をなじっていないか
- ②過去のことをほじくり返していないか
- ③自分の満たされない気持ちや子どものふがいな
- ④どうやったら伝わるのか考えているか
- ⑤以上のことを含めて子供の自尊心を踏みにじっていないか

●「せめて受験期だけでも関係を良くしてやりたい。そのために手がかりがほしい。」という方は私のほうまでお申し出ください。多少はお役にたてると思います。勿論、あなたの大切なお子様には秘密です。(小林)